

国外図書館実習（台湾）を経験して

五十嵐 雪将（法学部政治学科）

1 はじめに

私は、2018年8月6日～17日のうち、平日のみの10日間で国立臺灣大學圖書館を中心に国外図書館実習を行った。実習前後は出入国に余裕を持ったり、現地で実習に必要な本を購入したりしたため、実際の滞在日は8月4日～20日となった。今回の実習は私の他に、司書課程に登録している学生をもう1名含めた、計2名で行われた。そのような実習について、今回は台湾で行うことの意味、実習内容、実習で求められたものや得たものを順に説明していく。この文章の読者は、これから国外図書館実習へ行く人を主眼としつつも、国内で実習をするつもりの人、実習とは別に台湾へ赴く人も想定している。また、全部は読みたくはないけれど、エッセンスは得たいという人を考えて、章立てを構成している。

2 台湾へ行く意味

私は台湾への渡航が、この実習時点で5回目であった。実習の相方は初めての台湾への渡航であったが、私は2017年も立教大学の中国語海外言語文化研修で、台湾に3週間滞在していたので、実習の前年に台湾に長期間滞在した。

そんな私における台湾へ行く意味は、「図書館」というフィルターを通して台湾を覗いてみるということである。これまで、観光、趣味であり高校の卒論テーマでもあった鉄道、そして中国語というフィルターを通して覗いてきた。また、学部では政治という点から台湾を覗いたこともあった。ところが、図書館というフィルターを通して覗いたことがほとんどなかった。そんな私に図書館というフィルターを与えるきっかけになった出来事が、2017年度に行われた「図書館・文書館の国際動向 2017」というシンポジウムであった。そのシンポジウムにて、台湾の図書館を紹介されたことで、台湾の図書館が発展しているということを知ったので、実習で図書館に行ってみたく考えた。

ところで、台湾は身近だと感じる人もいるかと思うが、よく見れば日本としっかり違う点が一杯ある。まず、言語は多くの人々が繁体字の中国語を用いる。また、政治的には非常に難しい立ち位置に置かれている。さらに、民族も少数民族がたくさんいて、実は様々な点が日本とは異なる。でも、そんな台湾にも図書館は存在している。全く異なる環境で、図書館がどういう風に存在しているか見たかった私は、台湾へ行って実習したいと考えて、実習及びその準備に臨んだ。

3 実習内容

実習では様々な場所や人のもとで、様々なことをこなした。全体を通しての実習内容と、各部署や各図書館に分けて、概要を説明する。

全体を通しては、国立臺灣大學圖書館の Extension Service Division という所で各種実習についてコーディネートをして頂きながら、図書館内での展示及び実習最終日に行う発表の準備をした。この準備は、実習前の春学期に行われた「図書館総合演習」でも進めていたもので、事前に企画書や展示に用いる本のリストは英語で作成済みであった。展示に用いる本の殆どは日本で購入をして持ち込んだが、一部、日本では手に入らない本を用いたため、台湾の誠品書店というところで購入したものも用いた。こうした実習前の準備に加えて、実

習中はポスター作りや、ブックスタンドなどを用いた配置などを行い、同時進行で発表についてもプレゼンテーション用のスライド資料を作ったり、構成や内容について相談したりした。

また、国立臺灣大學圖書館の Extension Service Division 以外でも、見学を行った。国立臺灣大學圖書館では、Extension Service Division と同じ建物にある原住民族圖書中心や、同じ校地でも別の建物にある辜振甫先生紀念圖書館という社会科学系の図書館、別の校地であって、病院に併設されている醫學圖書館を見学した。それ以外では、台北市の隣にある新北市の新北市立圖書館という公共図書館、國史館という公文書館、日本でいう国会図書館のような役割を果たす國家圖書館、国立図書館として本の病院などの機能を備えつつ、公共図書館の側面も持つ国立臺灣圖書館をそれぞれ見学した。ちなみに、ここでの本の病院とは、本の修復をする場所という意味である。いずれも、「2 台湾へ行く意味」で述べたような要素が得られる見学で、デザインに優れていたり、24 時間全自動で貸出可能な機械だったりを見て、私は日本では受けることのできない刺激を受けた。

さらに、国立臺灣大學圖書館においては、Special Collection Division と Acquisition and Cataloging Division で仕事を行った。Special Collection Division では日本語の貴重資料を見学した後で、貴重資料を中性紙で包む作業や、電子化資料を作る上で日本語情報を打ち込む作業などを行った。Acquisition and Cataloging Division では新規資料及び寄贈資料の受け入れ態勢や、MARC への登録について学んだ上で、実際のシステムへの登録作業、ラベル付与などを行った。このような実習館における仕事でも、見学と同様に、司書課程の中や日本の中に留まるだけではできない体験が出来た。

このような形で、国立臺灣大學圖書館のみに留まらない形の実習で、約 2 週間のプログラムを完了した。今回の実習は全体を通して、様々な場面で台湾へ行く意味があったなと感じることができるものだった。実習内容は盛り沢山でもっともっとここで述べたいこともあるが、この辺りにしておく。

4 実習で求められたもの

実習で求められたものは、挑戦する気持ち、司書課程の学び、そして現地の交通機関に詳しいことであった。あくまで列挙したものは、私が実習で求められたと感じたものであるが、今後も台湾で実習する者がいれば同じことを感じると思う。

まず、挑戦する気持ちについて、私はどこで実習する場合にも求められることだと考えている。実習するということは、必ず大学の授業から離れることになる。つまり、大学や教授陣の管理から離れる部分が大いにあるということである。そういった環境で約 2 週間を過ごすということは、自分で何をするかに物凄く重点を置かなければ、有意義でなくなる上、実習の相手方にも失礼になってしまう。だから、自分の中に挑戦する気持ちがなければ、どんなに勉強や語学が出来ても、実習では通用しないと私は考えている。実のところ、私は英語について、特に得意であるわけでもないの、能力を証明するものは高校生の時に取った英検 2 級のみである。そのような英語力であっても、必死に現地に行くまでに演習の中で練習したり、図書館で用いる英語を本で学んだり、現地でも知っている限りの表現で伝えたりと、挑戦する気持ちで補完してきた部分は多くあった。英語が出来て、挑戦する気持ちがなかった場合は、結局実習の相手方に示すものはなくなってしまうだろう。しかし、英語が出来なくとも、挑戦する気持ちがあれば、必死に実習の相手方に示すものがあるので、英語以外で思いついた展示のデザインや、自分で写真を撮って示すことも出来る。したがって、挑戦す

る気持ちは実習で求められたものの中でも最も重要であると考えられる。

次に、司書課程の学びも忘れてはならない。司書課程で学ぶことは、個々を見ていくと科目ごとにつながりを感じられないと思う人もいるだろう。でも、司書課程で学ぶことは現場に行く面白ようにつながっていく。例えば、図書館にまつわる情報技術を学ぶことと、分類や蔵書構成などについて学ぶことがつながらないと考える人も中にはいるだろう。しかし、図書館の現場に行けば、いずれの学びも当たり前のこととして実践されていて、新しいOPACの導入について検討していたり、OPACを入れる以前にその図書館がどういった分類や蔵書構成なのかという情報が必要だったりする。このように、司書課程の学びは図書館を動かす肝となっている。また、実習に行った人の中には、現場に行って初めて学ぶことに流されて、ついつい司書課程の学びがいかにか重要かを忘れてしまう人もいるかもしれない。私もそのように流されかけるほど、現場で多くのことを学んだが、冷静に振り返れば、司書課程の学びはベースとしてとても重要であったと考えている。司書課程で学ぶことは、図書館をいかにいいものにしていくかということに繋がっているはずなので、この学びがない人は図書館で目の前に課されたものをこなすだけの存在になってしまうだろう。だから、実習で短い期間しかいないとしても、図書館に関わる一人の存在として、司書課程の学びを生かして、図書館をより良くしていくことを考えておかなければならないと私は考えている。そして、司書課程の学びを踏まえて、立教大学の図書館ではどう生かされているか、日本の図書館ではどう生かされているかという点で深めておくと、その学びは実習によりよく役立つだろう。例えば、立教大学では貴重資料がどのように扱われていて、電子化もどのようになされているか学んでおくと、台湾に行った時によりよい学びを、実習館の担当者も実習生自身も得られるだろう。

最後に、海外での実習に限られてしまうが、現地の交通機関に詳しいことはとても重要である。海外で実習する場合は言語が違う上、一つの図書館に留まらないことが多い。例えば、私たちの場合は、午前中は Extension Service Division がある国立臺灣大學圖書館にいて、午後は同じ校地の辜振甫先生紀念圖書館と、別の校地の醫學圖書館という順番に、計三つの図書館を周った日があった。その際、辜振甫先生紀念圖書館の見学後は、朝の出勤時の校門と別の場所で解放されて、最終目的地の醫學圖書館に行かねばならないという出来事があった。出勤時の校門と違うところで解放されてしまうと、最寄り駅は異なるので、私たちは出勤時とは別の駅をスタッフに案内された。私は現地の地下鉄の路線図を頭に叩き込んでいた上、駅名を中国語で読めたので、何の不自由もなく時間通りに動けた。私は、鉄道研究会のメンバーである上、台湾の渡航経験も複数回あり、中国語が読めるので、そういった状況でも対応できたが、普通はまず対応できないだろう。意外と見落としがちだが、日本人の多くは台湾の路線名や駅名を日本語読みしてしまうため、現地の人と駅名について会話をしようとすると、そのままでは上手くいかない。「文湖線」の「科技大樓駅」と案内された時に、日本語のまま読んでしまうと、中国語はおろか、英語でも通じない。これらのローマ字表記は、中国語での読み方をベースとして路線図に書かれているので、そのローマ字表記が分かれば、英語でも通じる。この説明で私の言いたいことが分かりにくい場合は、日本の路線名と駅名を考えれば分かる。「山手線」の「池袋駅」という場合、英語でも日本語の読み方をベースに「Yamanote Line」の「Ikebukuro station」と表現しなければならないはずである。これを中国語で読んだとしても、日本で通じるかは中国語の能力にかかってしまう。つまり、現地の交通機関について現地の言語で知っていないと、英語を媒介させて会話する場合でも、通じなくなってしまう。だから、この実習では現地の交通機関に詳しいことが、実

は求められていた。現地の交通機関に詳しいことの重要性は文面だけでは伝わらないかもしれないが、実際に実習へ行くとすぐに理解できることだと思う。

実習では、以上の三つのことが主に求められていた。勿論、他にも健康であることや、時間にルーズでないなどのことも当然に求められていることは忘れてはいけないが、それらは国外で実習することにあまり関係しない上、他のあらゆることでも求められていると思う。だから、それらのことは当然として、以上の三つを強調しておく。

5 実習で得たもの

実習で得たものは、理論が現場で活かされていることと、仕事を人とするものの難しさである。他にも多くのものを教えていただいたが、この二つは特に大きな学びであった。

一つは、理論と現場がしっかりと関係がしているということである。これは、実習で求められたものとも被ってしまうが、司書課程で学んできた理論は現場でしっかり生かされている。例も実習で求められたもので伝えてしまったが、理論は現場で決して疎かにされていない。理論と現場のつながりをしっかりと見たり感じたりできるのは、司書課程を実習なしで終える者にはアルバイト等々で現場と関わらない限り、体験できないことだろう。ここは実習に行く意味として大きいので、実習に行く人はぜひ理論が現場で生かされているか確認しに行くようにしてほしい。

もう一つは、仕事を人とするものの難しさであるが、この点はもしかしたら実習以外でも得られるかもしれない。ただ、私は実習で改めてこの点を学んだので、得たものとして挙げた。私は自分の中で一生懸命、展示や発表に対してビジョンを描いてから、実習に臨んだ。しかし、現場についてから、実習の相方及び実習館の職員とはビジョンが上手く被らないことが分かった。実習の相方は実習の相方なりにしっかりとビジョンを作っていた。当然、実習館の職員は既に展示や発表のプロとして働いているので、ビジョンを持っていた。ビジョンを持っている者同士がいざ仕事をしようとなったときに、上手く擦り合わせようとするのは大変難しいことだった。勿論、ゼミ活動でこのような経験を持つ人は一杯いると思うが、これを大学の中でなく、仕事としてやるというのは、より難しいことであった。最近では、全学共通カリキュラムでもそういった体験が出来るプログラムが見られると思うが、専門職の資格を目指す者として立ち向かうことは、そういったプログラムよりも重たいことだろう。私たちは実習館の職員が求めたものに擦り合わせる努力も一杯した。その努力の中で、私は大学からすでに離れている以上、捻りだすにも限界があることを認識していたが、実習の相方は自分が思っている以上の限界に挑戦しようとしていて、本当に妥協点を探すのに苦労した。最後は展示も発表も完成したが、ビジョンを擦り合わせることに苦労したことは忘れられない。

このように、実習に赴くことで得たものは座学で司書課程の授業を受けているだけでは得られないものだった。

6 おわりに

ここまで様々な要素を詰め込んで展開してきたが、いかがだっただろうか。今回の文章は、読みにくいと感じるほど色々な要素が詰まっていたと思う。それだけ台湾での国外図書館実習は、色々な要素が詰まったものであると読んで理解が出来たのであれば、筆者として満足である。

さらに、実習自体や国外へ実習するかについて悩んでいる人がこれを読んで良い判断をす

ることに繋がったのであれば、幸いである。まだ悩んでいる場合は、大学に入ることや、司書課程に登録することの意味を自分に問いかけてほしい。私は、大学に入ることでも司書課程で学ぶことも、楽しいたためではなく、チャレンジをするためにやってきた。だから、より一層チャレンジをするべきと考えて、国外で実習することを志望した。楽をするのではなく、追いこんで楽しい思いをするというのも悪くないと思うので、悩んでいる人はそのことを少し考えてもらえたらと思う。

ちなみに、チャレンジをしてやり切った私は、実習の最終日が終わった直後に知恵熱を出して、一晩宿で寝込んだ。実習の最終日から3日後に帰国の途につく予定だったので、元気になってから帰国することができた。ただ、それだけ自分を追い込んだ経験だったということは、振り返ってもやり切れたと言い切れる証拠だと思う。体調を崩さない方が勿論良い訳だが、今となっては良い思い出となっている。

この文章をきっかけに、台湾で国外図書館実習する人が今後も出てくることを祈って、本稿のまとめとする。